

# 常時活動が本時の活動に生きるための発問の手立て

学籍番号 219346

氏名 福井みのり

主指導教員 澤田 和夫

副指導教員 平井 裕也

## 1. 研究の動機と目的

筆者は小学校の教育実習で、音楽の授業時にある児童が「音楽の習い事をしてないから(演奏が)できない。」とつまらなさそうに発言している場面に遭遇した。筆者は「学校以外の音楽経験の有無に関わらず、音楽の授業で継続して音楽の力を積み上げることができる方法はないか」と調べ、常時活動という言葉を目にした。筆者は授業実践において常時活動を取り入れることで、どの児童も楽しみながら音楽的能力・知識を身につけることができるのではないかと考え、それによって得られる効果について研究したいと考えた。

本研究の目的は、「常時活動が本時の活動に生きるための発問の手立て」による効果を明らかにすることである。常時活動は長期的な構想で実施することが必要だと言われているが、本研究ではある一定期間で授業実践を行うため、筆者は「ある単元でつけたい力をもとに、常時活動を設定し実践する」ことでも効果が得られるのではないかと考えた。そこで、「常時活動と本時の活動をつなぐこと」と「発問の工夫」という2つの視点で授業実践を行うこととした。

## 2. 研究の方法

今回は、小学校2・3年生音楽科における、常時活動を取り入れた授業実践を行う。

研究の方法として、まず、常時活動の意義を調べ、本研究における常時活動を定義する。次に、基本学校実習Ⅰにおける実践の課題と常時活動の先行授業事例をもとに、短期間で常時活動を行う際に必要な視点を考察し「常時活動が本時の活動に生きるための発問の手立て」を設定する。次に、基本学校実習Ⅱ～発展課題実習Ⅱにおける授業実践の成果と課題を分析し、それらをもとに、結論と考察、今後の課題について述べる。

## 3. 研究の概要

### 3.1 基本学校実習Ⅰ(1年目前期)における取り組み

基本学校実習Ⅰでは、3年生器楽「ゆかいな木きん」の実践を行った。実践の結果、児童は常時活動の「拍を感じる活動」を活かして、本時の活動でも2拍子にのって演奏していた。しかし、それが本当に常時活動とつながっていたかどうか疑問が残ったので、筆者は「常時活動と本時の活動のつながりを教師が明確にもつこと」と「常時活動が活きるように、双方の活動をつなぐための発問」が必要であると考え、その手立てについて考察することとした。

### 3.2 「常時活動が本時の活動に生きるための発問の手立て」の設定

筆者は基本学校実習Ⅰから明らかになった課題と常時活動の先行授業事例をもとに「常時活動が本時の活動に生きるための発問の手立て」について考察した。それらは以下の通りである。

- ①本時の活動で扱う音楽の構成要素(共通事項)が関わった常時活動を毎授業の冒頭で行う。
- ②①では、その音楽の構成要素(共通事項)については、あえて触れない。
- ③本時の活動で、触れていなかった音楽の構成要素(共通事項)について発問で触れる。

### 3.3 基本学校実習Ⅱ(1年目後期)～発展課題実習Ⅱにおける取り組み

筆者は、各実践を振り返る中で「①振り返りシートの工夫(児童の学びの変容がわかる手立て/分析方法の精査)」と「②授業のねらいを明確にすること」の2つが必要だと考え、それらに焦点を当てて実践を行った。①では「毎授業後に記入し、学びの変容を見る/設問を具体的にしてい何を書くかわかりやすくする」という手立てをとった。その結果、どんなことに気づき何を学んだかという振り返りの記入が多く見られた。②では、器楽のグループ練習に重きを置き、4つに分けたグループ練習を行った。その結果、筆者自身は児童に対して机間指導で適切な声かけができ、児童は集中して練習に取り組むことができた。

## 4. 結論

結論として、この手立てを用いた実践において、児童は常時活動を本時の活動に活かしたり、自分の活動を振り返ったりしながら、授業を重ねるごとに学びを深めることができていた。そう判断した理由に、児童が記入した振り返りシートで「約7割の児童が授業のねらいに関する言葉を記入していた」ことがあげられる。授業を重ねるにつれ、振り返りシートでは、授業のねらいに関する記入が増えていた。つまり、児童は授業の中で学びを深めていると言える。また、毎時間常時活動を行っていたこと、常時活動と本時の活動を同じ共通事項にしていたことから、児童は常時活動を本時の活動に活かしていたと考察できる。加えて、児童は授業を重ねるごとに積極的に演奏を行っていたことや、常時活動においても楽しくかつ主体的に取り組んでいたことがわかった。

## 5. 今後の課題

今後の課題は、次の3点である。1点目は「児童が深めた学びについて、言語として表すことができる手立てを考えること」である。今回は、学びを深めている様子は見られるがそれを言葉に表せていない児童が見られた。そのため、児童が学んだことや考えたことを言葉で表せる手立てを考えたい。2点目は「6年間を見通して、児童の発達段階に合わせた常時活動を考えること」である。今回、常時活動が本時の活動に活着していると客観的に言い切ることはできなかったが、「どんな常時活動を行うと、より効果があるか」という点の考察が必要だとわかった。3点目は、「教科にかかわらず、児童の“気づき”が“学び”となり、そしてそれを深めるような手立てを研究すること」である。筆者は今回の実践を通して、音楽だけでなくどの教科においても、児童の気づきが学びに変わることは必要だと考えた。今後は小学校の様々な教科において、児童の“気づき”が“学び”となり、そしてそれを深めていけるような手立てを研究したい。